

第205回昭和の森自然観察会

「冬芽」

晝間 初枝 (四街道市)

日 時：2009年1月11日（日）13～15時 天気：晴

参加者：大人16名 子ども5名 指導員28名 合計49名

担当者：佐野由輝 金枝考禎 晝間初枝

冬晴れの空に葉を落とした木々がくっきり映し出され、身が引き締まる新年初めての観察会。

午後からは風もおさまり、この時期としては絶好の観察日和となりました。コースは日だまり・ゆったりコース！子どもたちを交えて1本1本じっくり観察、あつという間の2時間でした。

テーマは「冬芽」。冬の寒さや乾燥から身を守るために樹木はいろいろ工夫しています。ふだん気にとめることのない冬芽や葉痕もよく見ると一つ一つの花や葉が違うようにどれも個性的な表情を見せていました。今回は、春に向けて着々と準備している冬芽のパワーとユニークな葉痕から自然のすばらしさ、おもしろさを味わってもらいたいと思いました。

スタートは冬芽をたくさんつけたソメイヨシノ。冬芽の役目や形態、観察のポイントをみんなで確認しました。頂芽、側芽、芽鱗、葉痕、芽鱗痕等々、なじみのない名称は参加者に少しとまどいもあったようです。続いて常緑樹の代表格のシロダモとタブノキ、芽鱗にしつかり包まれた冬芽を枝先につけ、芽鱗痕が鮮明なので長枝の年数をみんなで数えました。裸芽のニガキ・ムラサキシキブはビロードのような幼葉に葉脈がはっきり見え、葉痕はなかなかおもしろい表情を見せっていました。折りしも幹の瘤みにいたヨコヅナサシガメの幼虫に子どもたちは大喜び、しばらく見入っていました。

一面に香るスイセン、ほころび始めた紅梅を観ながらゆっくり歩を進めました。「ガタガタした模様がある！」女の子の鋭い言葉に感心しながら、コナラの芽鱗の数当てに挑戦…。そこでコナラの冬芽は5本の稜があることから、一つの稜の芽鱗の数から全体の数がおおよそわかることを説明するとみんな納得…。春を告げる花キブシ、葉や枝が芳しいクロモジは花芽が膨らみ、葉芽との違いがよくわかりました。上等の毛皮のコートを着ているようなコブシの花芽は、触るととても心地のよいものでした。

今日一番の大きい冬芽はカシワ。がっしりした姿に圧倒されました。カツラとイロハモミジは、冬芽のつき方は似ているけれど、枝の張り方が違うことから、そのわけをみんなで考えたりしました。東屋近くのイヌシデとアカシデ、並んでいるので冬芽を比べるには最適、鋭く尖ったアカシデ、ややぼっちやりしたイヌシデをほおに当てその違いを肌で感じてみました。葉柄内芽のハクウンボク、今は葉が落ち、毛に包まれた主芽に小さな副芽が寄り添っていました。

寒い中でしたが、参加された皆さんが間近で冬芽を手にとり、冬芽の世界を楽しんでいただけたのではないかと思いました。

(参加者の感想)

- 木の芽は、真冬から準備をしている。芽の形、芽のつけ方が木によって違う。
- 春になったら、この芽がどのように変化しているか見てみたい。新しい発見があり、ものの見方が変わるように思った。
- いろいろ形や色の芽がある。木の形もいろいろあっておもしろい。
(子どもの声)

